別冊 センターつうしん NO.75

こども教育文化

第9号

もくじ

「モンスターくん」あらわる！ ～ダンボールを使った小学校1年生の走・跳・投の運動～ 江島 隆二…1
三十一文字で紡ぐ世界 小野寺浩之…6
少林寺をやめてしまうこと さとうゆうたろう…10
児童像 みやざき・のりお…11
教師が育つということ 佐々木光一…15
宮城の教育遺産 9 文彦にあてた磐渓の手紙 ―教員養成の源流にふれて― 大村 榮…17

「モンスターくん」あらわる！

～ダンボールを使った小学校1年生の走・跳・投の運動～

江島 隆二

はじめに

本実践は「陸上競技」文化の源（みなもと）を探りながら「走・跳・投」ひとまとまりの教材として構想し、それを子どもたちと追究したものである。実践の中で、子どもたちはさまざまな技術を発見したり身につけたりしながら、「走・跳・投」の能力を伸ばしていった。なお、本実践は2005年10月19日～11月9日（全10時間）に前任校の鶴巣小学校で行ったものである。

1　子どもたちについて

（1年生男子8名　女子10名　計18名）

6月に体力テストがあった。1年生なので「みんな泣かないでつつがなく記録がとれればいいがな」ぐらいに思っていたのだが、ソフトボール投げを見て愕然とした。本気で投げて3mとか4mしか飛ばない。「投げる」という経験がほとんどないのだろうということが推測された。また、音楽でケンケンパーをやったら大部分の子ができなかった。走り方については、低学年特有の頭をまえにしてちょっとつんのめるような感じで走っていた。スムーズな走り、バランスのよい走りにしたいと思った。

2　教材について

まず、子どもたちにオーバースローの投げ方を教えたいと思った。また、走運動や跳運動をスムーズにさせたいと思った。将来的には陸上競技の学習内容なのだろうが、1年生の学習内容として陸上競技を教材にするのは当然無理がある。そこで陸上競技の源のようなものを1年生の教材として再構成してみた。

3　実践のねらい

○ 走る・跳ぶ・投げる文化を総合的に楽しく追究させる。（教材としての有効性）
○ 走る・跳ぶ・投げる技術・能力の獲得。

4　実践の経過（次頁表）

5　実践の実際

1時間の授業の中にいくつかの学習内容を設定した。また、前時の学習内容は、次時の準備運動などに取り入れ習熟をはかっていった。

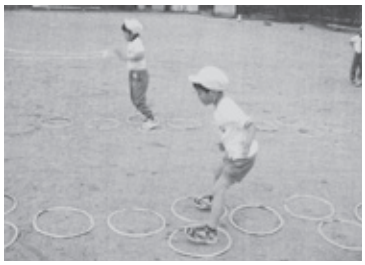
（1）ケンケンパーの学習（第1時～）

ケンケンパーがすぐにできたのは約半数だった。リズムを言いながらその場で練習したらグン

とできるようになった。その後、「グループで工夫して輪を置いて跳んでみよう。」と話した。子どもたちはすぐに乗ってきて、いろいろな置き方をしては試しに跳んでいた。ゴムホースの輪は移動が簡単なので、教具として優れているのではないかと感じた。

次の時間になると、全員の跳び方が安定してきた。戸惑っていた昨日とは別人のようである。繰り返しの大切さを感じた。

また、口でリズムが言えるようになると格段に跳べるようになった。リズムの先取り、運動のイメージができるようになるとできるようになることがわかった。



ケンケンパー

ケンケンパーはその後の時間も準備運動として取り入れ、習熟をはかっていった。

（2）いろいろ走の学習
走りの秘密を探る（第2時～）

校庭に2本線でいろいろなコースを描きそこを走った。ぐにゃぐにゃだったり、雷のようにギザギザだったり、カタツムリのように渦巻きだったり……。校庭に2本の線を引くだけで子どもたちは普段とは違った世界に入り込み、それを楽しんでいたようである。しかし、それだけではすぐに行き詰まってしまう。小学校1年生だったら1年生なりの学習内容を追究していく必要がある。

〈実践の経過〉

時	けんけんパー	いろいろ走	ダンボール走	ダンボール跳び	投　げ　る
1	ケンケンパー グループで考える	うずまき ワニの落とし穴			
2	〃	うずまき ワニの落とし穴 いなづま	いろいろ走路で跳んでみる		
3 体育	ケンケンパー ジグザク		直線路で飛ぶ練習		「モンスターくん」登場 投げ方のポイント
4	〃	いなづま うずまき ワニの落とし穴	箱の置き方を考える		向かい合ってモンスターくんにぶつける練習
5	〃	〃	箱の置き方を話し合いリレー		向かい合ってモンスターくんゲーム（時間制）
6	〃	全部つなげて	〃	砂場で飛んでみる（1，2段）	向かい合ってモンスターくんゲーム（個数制）
7			〃	片足踏み切り両足着地。どうしたらうまく跳べるか	縦長モンスターくん 強くぶつける
8			〃	〃	モンスターくんたおしゲーム
9			ダンボールリレー		遠くに投げる
	「モンスターくん」への道（ソフトボール投げ記録測定）				

「いなづまコース」で子どもたちに「角のところでスピードを落とさないようにうまく走るにはどう走ったらいいかな?」と問いかけた。すると「からだをまげるといいよ」という意見が出た。「じゃあ、みんなでためしてみようか」と言って、カーブでの体の傾きを意識させた。「あとないかな?」と聞いたところ、「角のところで、あしをぎーっとやるといい。」と言い実演もしてくれた。多くの子どもがうなずいていた。カーブのところで外足をしっかり踏ん張るということである。「曲がると、ころで足をまげる」という意見も出た。曲がるところで少し体重を落とし歩幅を狭くするということだ。子どもたちとの何気ないやりとりだが、カーブを走る時、①からだを傾けること、②外足に加重す

ること、③重心を少し落とすこと、という大切な学習内容を確認できた。

・　はしりやすくするにはつちをかたくする。やわらかいとはしりにくいよ。カーブのところはからだをちょっとだけまげるとはしりやすいよ。

・わにのおとしあなではあしをひらくといいよ。ほそいみちではあしをとじてはしればいいよ。それにいなづまコースではしってたのしかったよ。

いろいろ走り

（3）モンスターくんとの投げる学習

①　その名はダンボールかいじゅう「モンスターくん」（第3時～）

大きなダンボール4個を積み重ね、ボールを当てる的をつくった。子どもよりはるかに大きい。きょうはいよいよデビューである。休み時間のうちに、ステージの幕の陰にスタンバイ！

T「きょうはこれから投げる勉強をするけど、お手伝いを呼んでいるんだ」

C「えー」「だれ？」「どこにいるの？」……

―舞台の幕が開く―

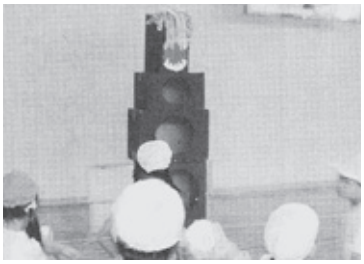
C「うわー」「ぎゃー」……

T「すごいね。この人（？）がみんなの投げる勉強のお手伝いをしてくれます。でもね、まだ名前がついていないんだよ。みんなで考えてあげて……」

C「かいじゅう」「おばけ」「ダンボールかいじゅう」「モンスター」「モンスターがいい」

T「じゃあ、ダンボールかいじゅう「モンスターくん」でいい？」

C「オッケー！」



モンスター君

ダンボールかいじゅう「モンスターくん」の誕生である。

②　モンスターくんと投げる練習をしよう

まず、ボールを投げるポイントをしっかりと教えた。

その1「ボールは3本指で持つ」

まず3本指での持ち方を教えた。硬式テニスボールは大きさがちょうどいいと感じた。

その2「投げる手の反対の足を前に踏み出して投げよう」

右手投げならば、左足を前に踏み出して投げるということである。これだけで投げ方が変わった。「足を踏み出して」という言葉がけがよかったようだ。

その3「いーちにーのぉさん」で投げる

腕を前で交差させて準備し、「いーち」で横に大きく広げ元に戻し、「にー」でまた大きく広げ「のぉ」で後ろに少し沈み込みながら投げる方を見て、「さん」で前にガバッと投げ出すのである。投げる動作が大きくなるので有効だと思った。

第5時以降は、モンスターくんを使って、穴に入れるゲームや、モンスターくんにボールをぶつけて倒すゲームなどをしながら投げる習熟をはかっていった。

・　ボールをなげるときうでをおおきくやるとよかったよ。モンスターくんはこわかったよ。もんすたーくんとともだちになりたいな。

・　ボールをなげるとき、手にちからをいれる。ボールをなげるときからだぜんたいでなげたっけじょうずにできたよ。

（4）ダンボール走の学習

グループで話し合う（第4時～）

走りの中でダンボールを跳び越すこと（ハードル走のようなこと）は第2時から少しずつ行っていた。第4時からいよいよダンボール走の学習を

本格的に始めた。

「今日の勉強はこのコースにどのようにダンボールを置いたらスピードに乗って気持ちよく跳べるか、はこの置き方を考えます。」と説明しさっそく始めた。

はじめは適当に置いたので、箱の間隔はバラバラだった。跳んでみると跳びにくいことがすぐ分かり、どの班も等間隔で間をあけた並べ方になっていった。だいたい落ち着いたところで子どもたちを集め聞いてみた。

T「みんな、どんなふうに並べると跳びやすかった。あるいは跳びにくかった?」

C「はこを横にして置くといい。」「縦だと跳びにくい」

T「じゃあ、はこを置くときは低く置くと跳びやすいんだね。あとは?」

C「まっすぐに置くといいよ」

T「まっすぐって?」

C（手を前ならえのようにして）「こうまっすぐに……」

T「なるほど、斜めになったりしないようにだね。」

C「遠すぎると跳びにくい」

T「遠すぎるとリズムや踏み切りが狂うのかな?」

C「近いと跳びにくい」

T「近いとどうして跳びにくいの」

C「ひつかかるみたい」

本時では①箱を低く置くこと、②箱をコースにまっすぐに置くこと、③間隔は近すぎても遠すぎても跳びにくいことが学習できた。

また、時間が進むにつれ、「ダンボールの間5歩」というように歩数で測って箱を置いていく班が出てきた。ダンボールを等間隔に置くために歩測することを発見したのである。

陸上競技のリレーなどでは当たり前にやられていることだが、自分たちで歩測を使い出すとは思ってもいなかった。

ダンボールを跳ぶ姿がずいぶん力強くなった。スピードに乗って走り抜ける感じがでてきた子がたくさんいた。

・はこをきれいできもちよくならべるようにするには、くっつけすぎないようでなるべくはなれてするといいよ。

・だんぼうるをならべたときかんがえてやったんだけどひくいのからだんだんたかいのにならべたよ。でもリレーではまけちゃった。

ダンボール走

（5）ダンボール跳びの学習

上手な子から学ぶ（第6時～）

ダンボール跳びは、ダンボールをまとめて置いて、走り幅跳びのように跳び越す運動である。着地の安定と、思いきった踏み切りを目的に授業を進めた。しばらく練習してから、「跳び方がとても上手な人に跳んでもらいます。いいところはどこか見つけてね。」と話し観察した。

C「両足でちゃんと着地している。」

T「そうだね。着地がとても上手だね」

C「スピードが速い。」

T「そうだね。ビューンって走ってるね。」写真

C「一生懸命走っている。」

C「真剣な顔でやっている。」

T「真剣な顔をしていたね。跳ぶときは真剣なんだね」

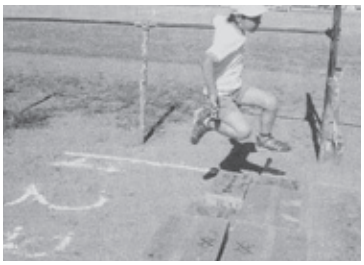
C「腕をいっぱい振っている。」

T「よく見っけたね。腕をいっぱい振るといいんだね。」

身近な友達の跳び方を見て、重要なポイントを確認した。

・きょうたいいくでだんぼーるをとぶときかたあしでたかくとぶといいよ。わたしはかたあしでとぶとできるよ。モンスターくんにボールをなげるときおおきくなげるといいよ。

・わたしは、2だんしかとべなかったけどうまく



ダンボール走

なったよ。うまくとぶには、スピードをだしてはしるといいよ。あんまりだしすぎてもとべないよ。

(6) モンスターくんへの道（第10時）

最後の時間には、これまで学習してきたことを全部つなげて、「モンスターくんへの道」と題し学習のまとめとした。

子どもたちは冒険気分でコースを走り、最後にモンスターくんに思いっきりボールをぶつけていた。

「もんすたーくんとたいいくたのしかったよ」
スーパージャンプですこしはこけたけどすぐできたよ。かみなりの上たのしかったです。かみなりの上ではほんとうにかみなりみたいでした。かみなりの上からへびのからだにいったのがふしぎだったです。へびのからだからいなづまにいったのがたのしかったです。ぎざぎざけんけんでこけたよ。だんぼうるとびでうまくとべたよ。もんすたーくんとぼーるをなげたのがたのしかったよ。

6　まとめ

①　走り、跳び、投げる世界を味わう

実践全体を通して、とてもおもしろいと思ったし、子どもも喜んでやっていた。「走・跳・投」の3本立ても「陸上競技」という文化の源の雰囲気を醸し出していたし、1年生なりの学習内容が豊かに存在すると思った。

②　走・跳・投の運動の技術向上で動きがスムーズになる。力強くなる。

実践の中で、子どもたちの運動がスムーズに力強くなっていったことが印象的だった。ダンボール走では、スムーズに力強く跳びこえることができるようになった。投げる運動では、ボールの持ち方、体の向き、テイクバック、足の踏みだしができるようになった。

6月に行った体力テストのソフトボール投げの記録と比較してみてもかなりの向上が見られた。

〈ソフトボールと50m走の記録の変化〉

	ソフトボール投げ(m)		50m走(秒)	
	6月17日	11月9日	6月17日	11月9日
男子平均	7.88	10.75	12.05	11.06
全国平均	9.21		11.06	
女子平均	5.11	6.70	13.05	12.00
全国平均	5.75		11.09	

③　教材（教具）について

線を引いただけで、輪を置いただけで、モンスターくんが現われただけで、そこは日常の校庭や体育館から特別な空間へと変わる。特に1年生はするどく想像の世界を広げることができる。そして、その空間が動きを引き出していった。ただ、学習が進むにつれて運動自体のおもしろさを追求していくようなものへと学習の中身を発展させていかなければならない。

④　からだで（動きで）わかっていくのと言葉で（話す・書く）で表わすこと

1年生は動きの中で感じながら運動課題を解決していく。まず、それを耕すことが大切である。運動を繰り返したり、友達の動きを見て自分の動きにどんどん取り入れていくことも多かった。そしてもう一方では、わかったことを言葉で表わす学習も必要である。言葉で表わそうとすることによって学習の対象になるし、運動の課題や解決が鮮明になっていった。

7　おわりに

「ヒトは文化を獲得していく中で人になる」と言う言葉をよく思い出す。豊かな文化を友達と（教師も含め一ともに、自分のからだ、頭（心）に刻み込んでいくことが教育ではないかと思っている。それは、体育に限ったことではない。現在のような教育を取り巻く状況だからこそ、一層その感を強めている。

（黒川・大衡小）

編集部注：「教育文化」476号（2006年11月）から転載しました。

三十一文字で紡ぐ世界

小野寺　浩之

1　子どもたちの作品から

今日もまた興味ひかれる
短歌には
夢中になれる国語の時間

佐藤荒野

耕運機
朝からゴオーゴオー鳴り響く
この音なくなりゃ秋終わりかな

菅原競馬

教室に
入ればどんなやなことも
忘れてみんなと笑ってられる

菅野風音

子どもたちは、短歌を発表し合う時間を心待ちにしている。わずか10分程の時間だが、いつの間にか子どもたちの思い出を出し合い、語り合う場になっている。とりたてて短歌指導をしたわけではない。稚拙な作品だらけだ。

でも子どもたちは一つ一つの作品を、まるで自分を確かめるように大事に詠んでいる。いつの間にか、短歌は教室になくてはならないものになっている。この取り組みの出発点は国語の短歌であった。

しかし子どもたちの紡いだ世界は、国語という枠を越え、各教科に行事にと、夢となって広がっていった。父母や地域の大人たちにも支えられながら……。

2　啄木って、誰？（授業で紡ぐ）

4月、第1回目の国語の授業。私の予想は完全にはずれた。私の担任する6年生は啄木のことを全く知らなかった。作品と顔写真を提示した後に返ってきた答えは、「石川啄木、誰、それ？」だった。この一言で逆に私の思いは強まった。よし、今年は4月から本格的に啄木に取り組んでいこうと。

まずは4月最初の参観月がポイントだ。子どもにとっては無関心でも親にとっては一度くらい啄木短歌を口ずさんだことはあるだろう。〈石川啄木クイズ〉で構成した最初の授業参観は、子どもも親も、いや子ども以上に親が興味を持ったようだった。夢中になって兄弟の参観を忘れそうになった親もいて、スタートはまずまずと言えるものであった。

以後、毎日一首ずつクイズ形式で国語の授業で、啄木の作品を取り上げた。啄木短歌を通して啄木の人生をなぞっていったのである。

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

石川啄木

平易な言葉で人間の刹那の感情を綴った作品が、子どもたちの心を捕らえるのに時間はかからなかった。5年生のどきに学ぶ意味を失いがちになった子どもたちは、夢中になれる何かに飢えていたのだろう。授業で示す啄木の写真やふるさとの風景に目を見開き、啄木目記の言葉に耳をそばだて、友人金田一京助とのエピソードに一喜一憂した。

啄木の思い伝わるこの言葉
だれもが夢中
短歌のひと時

佐々木明星

継続は力なり、わずか10分程度の時間であった

が（しばしばそれは授業時間の大半を占めることもあったが……）、10首を超える頃には期待以上にのめりこんでいった。

何かの都合で啄木短歌の時間をカットするとブーイングが起きた。いつとなく、誰となく啄木の短歌を口ずさみ、掃除の時間には、啄木短歌暗記勝負も生まれるようにもなっていた。この学年の子どもたちは、はみ出し願望があるのかどうか、薄幸の天才国民歌人としての名声より、「嘘つき」「ホラ吹き」「借金王」「傲慢」「破廉恥」「ナルシスト」……としての弱さを持った、人間啄木に興味を感じたようでもあった。

三十一文字の世界を通して、子どもたちが自己表現することのおもしろさを少しでも感じてくれればいい。私自身は授業を通して子どもたちといっしょに「啄木を丸ごと楽しんでみよう」3年連続6年生担任の3年目のこの年は、そんな思いで取り組める余裕も生まれていたように思う。

3　啄木に出会う旅（行事で紡ぐ）

子どもたちの好きな時期に、好きな所に行っていい。ただし計画は、日程、交通手段、見学施設の選定等から、宿泊場所の確保や予算組みまで一切子どもたち自身の力でやりきること。子どもたちや親と何度も話し合い、修学旅行をこのようなスタイルに変えて4年目の年を迎えていた。

7月1日から間に夏休みを挟んでの2か月間、調査の結果、子どもたちは数ある候補地の中から岩手県盛岡市周辺と、青森県の青森市三内丸山遺跡を選択した。岩手はもちろん石川啄木に出会う旅である。電話、FAX、パソコン……。観光協会、村役場、石川啄木記念館、岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会等など、啄木に関する集められるだけの資料を集めて、念入りに計画を練る。

石川啄木の故郷玉山村の渋民にある石川啄木記念館、そして渋民の山河に触れた子どもたちははしゃいでいた。案内をして下さった館長さんが子どもたちの意欲と啄木についての詳しさを高く評価したことに子どもたちの喜びも倍増した。今はなき坪沼小学校の旧木造校舎と、啄木も通いそして教鞭もとった渋民尋常小学校を重ね合わせていた子どもたち。

その校舎で念願の館長さん直々の特別授業も実現させ、啄木に関する新たな事実も発見し、満足感に浸った。宿泊ホテルでの大短歌発表会で、子どもたちは次のような作品を詠んだ。

啄木の
昔通った小学校
ギシッとなればなつかしい音
日下白星

啄木の
歩んだ道を踏みしめる
心に広がる岩手山あり
佐々木明星

七十五杯も食ったのに
おばさん食えと目で合図する
菅原競馬

あこがれの
渋民村への夢かない
啄木のことひたる一日
佐藤荒野

この時、啄木は歴史上の人物ではなく、子どもたちの傍らにいたのかもしれない。

4　素になれる（生活を紡ぐ）

私を短歌の世界に引き込んだのは啄木である。私に短歌の確信を持たせたのは、瞳、幹男という2人の教え子であった。

瞳。真っ赤なマニュキュアに厚底サンダルがトレードマーク。50人足らずの小さな学校の地域では、農作業するじいさまもしばし仕事の手を休め視線を送る存在である。彼女の口から、

「チョームカツク！　ウゼーンだよ」

このての言葉が発せられない日はない。

幹雄。表の顔は教師も信頼するリーダー。スポ少の野球命。勝負は勝たなきゃ意味がない！　勝てない勝負はやらない。これがポリシー。一方で時おり見せる顔は、良い子を演じ切れなくなった自分にいらだつ、プレ思春期の少年の姿であった。バラエティ番組に安らぎを求め、

「やりでぐね。めんどくせ」

を小声で連発するようになった。おもしろおかし

く暮らせりゃいい、投げやりに言う一言が気になっていた。

口を開けばことごとく対立しもめていたこの2人が、卒業記念短歌集作りの実行委員に立候補する。2人を結び付けたものも、短歌であった。

市販されている啄木に関する漫画、書籍、写真集、ビデオ、CD、テープ……を手に入れられるだけ買い込んで教室に置き、授業に取り組んだ。

「えー、何ー、啄木。うざい、それ」

「短歌？　書ぐの面倒くせっちゃ」

予想された反応である。しかし、教科書の短歌より平易な表現であるのと、啄木の破滅的、焦燥的な人生に自分たちをだぶらせたのか、はたまた賞品付き啄木クイズやかるた大会に引かれたのか、私が用意したグッズに手を出すのに時間はかからなかった。

4月から取り組んでいた百人一首が呼び水にもなっていた。面倒くさいを連発し、勝てる野球だけが生きがいだった幹男が、

「漫画百人一首の本借りでっていいがな」

こう言って、野球以外にもハマるものができたと、日々の家庭学習で毎日一首ずつ取り上げ学ぶようになっていた。

目でおうの精一杯の頃あった
百人一首
オレの生きがい　　幹男

瞳は百人一首の半分が恋歌であることに興味を持ち、自分を作品の中のヒロインにだぶらせ楽しんでいた。このような背景の中の啄木短歌だったこともあり、

「オレらも後で作るんだよね。まっ、しゃあねーな」

と言いながらも結構楽しみにしていたようであった。作文や詩を嫌う子どもたちも、三十一文字という長さが気に入ったのか、短歌作りを始め1月もすると様々短歌を詠むようになった。

夜遅く
今日の一日振り返る
自分が自分になれる一時　　幹男

短歌を詠み始めてしばらくしてからの幹雄の作品である。その日の日記に幹雄は次のように綴ってきた。

「オレも、ストレスや頭にきた時短歌をやると、素にもどったみたいでやすらげる気がする。（もしかして、オレにとっての短歌って、啄木と同じだったりして。）と思った。また一つ、短歌という好きなものを見つけた感じで、得した気分で今日も好きな短歌を作った」

その日、幹男はもう一首次の作品を作っている。

短歌ほど
夢中になるもの他になし
野球にはない魅力を感じる　　幹男

以後、短歌は幹男にとって自分探しの手段になる。

生い立ちの記に取り組んでいたある朝のことだ。瞳が珍しく職員室前にいる。

「きのうさ、あたし、ちょっとね」

そう言って私に手作り短歌ノートを差し出した。

「いじめっ子、トラブルメーカー」6年生までの瞳を知る人の周りの評価は、おおむねほとんどこの二つの言葉でたりた。こんな瞳自身と瞳をめぐる周りの評価が変わるきっかけになったのが修学旅行であった。瞳は毎日時刻表とにらめっこし、何度も何度もみんなの考えをもとに計画を練り直し、中心になって修学旅行の活動日程を作り上げた。

時刻表
毎日あれこれ調べては
次の日みんなに話す楽しみ　　瞳

修学旅行の取り組みの中で、瞳がみんなに送ったメッセージである。クラスのみんなから、初めて手放しで認められたことがいつしかかたくなな心を解きほぐすきっかけになっていた。クラスに受け入れられているという実感は、周りの人間にたいしても心を開いていくことになる。家族を見る目も少しずつ変わっていった。それまでの瞳は両親の前でも異装をしてつっぱるしかなかった。自分は両親からもけむたがられていると思っていたのだ。

そんな両親が生い立ちの記の中で自分の名前の

由来、自分に対する思いを真剣に語ってくれた。両親が語ってくれたことだけでなく、それを素直に受け止められるようになった自分もうれしかったのだろう。

瞳澄み
真っすぐ見つめる人になる
今から変わっていきたい私　　瞳

瞳の新たな旅立ちである。こうして瞳にとっても短歌は欠かせないものになっていった。

5　みんなの思いを一冊に

「本当に作れっかな?」
「うん?　何のごど?」
「前にさ、自分だちの歌集作れだらおもしろいなって言ってだっちゃ。本当に作れる?」
「やる気さえあったら、でぎんでねか」
決していいかげんなつぶやきでもなかったし、この時の返事も適当だったわけでもない。
しかし幹男の本気さに比べ、この段階での私の見通しは、かなりアバウトかつ甘いものであった。事の重大さに気付かないまま、12月の卒業に関わる実行委員会で、卒業製作、卒業アルバム、そして卒業記念短歌集の各実行委員会が発足した。瞳と幹男が立候補したのもこの短歌集製作である。これが思い出深い3ヶ月の幕開けだった。
短歌集製作実行委員が、実際に動きだしたのは3学期になってからである。私は夕カをくくっていた。子どもの短歌集だ、何とかなると……。そこにたちはだかったのは先立つものであった。作ろうとしたのは子どもたちの合意で文庫本サイズ。しかし卒業生がわずか10人にも満たないクラスでは、これでもかなりの負担だ。印刷業者に何度もかけ合う。親も含めた数度にわたる話し合いが持たれた。結果は、1冊のコストを下げるため数100部製本、1部1000円。一家庭20部を目標に販売。わたしは残りの部数負担。あくまでも一家庭当り20部売れればという前提であり、状況によっては私が一手にということもありえた。この状況を救ったのは子どもたち自身と、子どもたちの意欲に動かされた父母たちであった。
「短歌集作るなんてさ、一生に一回あるかないがだっちゃ。先生ぜひ作っべし。大丈夫、みんなでがんばればなんとがなるって」
勤め先、近所、友人、親戚……母ちゃんたちの動きは早かった。子どもたちも幹男や瞳を中心に手作りのチラシを作成し学区内のすべての家に配布をした。毎日予約が報告され、結局販売2週間足らずで完売された。私は自分の1部1000円を負担するのみで、予約分50部のキャンセルの謝罪にエネルギーを注ぐこととなった。
卒業式の日、幹男は卒業記念品としての卒業短歌集を誇らし気に校長に手渡した。その歌集の冒頭には、実行委員の瞳と幹男の合作による次の作品が載せられている。

短歌ほど夢中になるもの他になし
書きはじめると
止まらぬそのペン
卒業記念短歌集実行委員会作

卒業式会場に飾られた卒業式のテーマも短歌。式の中の未来への決意も短歌。担任の一人一人に対する紹介も短歌。別れの言葉の中で、啄木の作品と自分たちの作品を堂々と朗詠し子どもたちは旅立って行った。子どもたちの最後の短歌は次の作品であった。

六人でやりとげたこと誇りにし
乗り越え生きてく
希望の明日へ
六年生作

6　三十一文学で紡ぐ世界

「人間に刹那の感情をいとおしむ心がある限り短歌は滅びない。」(啄木)
三十一文字の世界と関わることにより、その子ども自身の世界を綴らせ、意識化させる。啄木の言う刹那の小さな世界に対する温め合いが、傷つき苦しむ子どもたちの自己を取り戻す一つの方法として意識化される。それはやがて他者への共感として広がっていく。こうして自己と他者を短歌は紡いでいく。ここに三十一文字の持つ世界の魅力があるように思える。子どもたちが語り紡ぎ合う一つの術として短歌ば大いに子どもたちを引き付け得る……短歌に出合ってからそう思う。

今年も父母の強力なバックアップのもと、様々な苦労とドラマを生みながら子どもたちは短歌集「新しき明日」を創りあげた。新聞になど載らなくてもよかったのだが、父母の働きかけでローカル新聞の記事になった。新聞により思わぬできごとが一つ生まれた。子どもたちの活動に深い理解を示して下さった市民の方から、子どもたちの計画した渋民村への卒業記念旅行に役立てて欲しいと寄付金を頂いたのである。子どもも父母も私もこのことに深く感謝しつつ、一泊二日の啄木との再会を満喫してきた。短歌に始まり短歌で終わった3年間であった。

私はと言えば……啄木の命日である4月13日。石川啄木記念館の館長さんの誘いに応じて、年休を取って啄木の90回忌に参加してきた。何でも私が遠い順から二番目だという。子どもたちは卒業していったが、私は啄木病から当分卒業できる見込みはなさそうだ。

（坪沼小）

編集部注：「カマラード」29号（2001年8月）からの転載です。

【日記】

少林寺をやめてしまうこと

さとう　ゆうたろう

エンジンの切れる音がしたとたん、ぼくはとびだした。とてもうれしいことがあったのだ。そのいいこととは、2年間、むりやりやらされてきた少林寺がやめられることだったのだ。

少林寺とは、昔、お父さんがやっていて、ぼくがあまりにもうんどうしないから、お母さんがぼくにやらせてきた、じごくにつきおとされたようにしんどい、けんぽうなのだ。

なにしろ、わざが少しでもまちがうと、うでたてふせ10かいやらせたこともあるくらいだ。

やっと、2年間のじごくからはいだせたのだった。

こんないい気分だったら、ごはんもいい気分でたべられるはずなのに、お母さんは、「今日はつかれたから、ごはんをつくりたくない」と言ったのだ。ぼくは、お母さんのめんどうくさがりにも、ほとほとあきれた。

しかたなく、少林寺をやってるところで、「やめる」と言って、帰るとちゅうにある「ほっかほっかてい」というところで買うことになったのだった。

そして、ぶどうかんに行くことになった。お母さんの顔をみると、それほどくらいようすもなかった。

ぶ道館につくと、いきなり、「いそいで、いそいで」と、なぜかさけんだ。そして、先生に「やめる」と言うと、お父さんまで「やめます」と言ったのだった。それは、前にも、「ゆうたろうがやめるんだったら、こっちもやめる」と、言ったからだ。

先生は、ぼくにも、「やりたくなったら、またこいよ」と言った。お父さんにも同じようなことを言った。ぼくは、心の中で、（先生に悪いけど、もうぜったいにこないよ。今、やっと、かいほうされたんだもん）と思った。

そして、ほっかほっかていに向かった。べんとうを作っているあいだ、お父さんはしんぶんをよんでいた。べんとうはぼくがもった。ぼくは、とんかつべんとうをビデオを見ながら、はらいっぱいたべた。ぼくは、まさに、じごくから天国へのぼった気分だった。

はじめて行ったときは、わくわくしていたけど、あとから、そのつらさがようやくわかったのだった。

その2年間、ぼくはくるしまなければならなかった。つきをされたり、うけみをしたり、その、いたいことつらいこと、まったくとんでもない思い出だ。今思い出しただけでも、みぶるいするつらさだった。

ほんとうに、やめてよかったと思った。

（1994年2月8日　3年生）

児童像

みやざき・のりお

いまもわすれることのできない子どもについてかたります。

＊

テル子は、教科書もよむよりはたべてしまうという子でした。3学期ともなれば、本の背だけがのこって23枚のやぶけたページがまくれあがってくっついているだけでした。5年生になってようやく二けたの加法ができるようになったというわけです。その子が6月になってこんな詩をかいてきました。

（6）

うしにくわるくさをとりにきました。
わたしのうちにはうしのこがいます
だからちいさいくさしかたべません

たなべてるこ

わたしは、これを詩とよびました。これが詩であるかどうかという議論はわたしには不要です。わたしが、この詩からどんな感動をうけたかは、この子の担任であったわたし以外の人にはわかってもらえないことかもしれません。だが、それにもかかわらず、このささやかなよろこびを多くの人びとにわかってもらいたいという願いも、わたしをつきうごかしていました。子どもたちの帰ってしまった教室、その教室の小さな子どもの腰掛に腰をおろしたまま、わたしはたつことをわすれていました。それほどまでわたしを感動させたものが、この詩にかきこまれている「だから」というひとことであったことに、おどろかれる人が多いにちがいありません。

＊＊

おもえば、テル子は5年になっていたのです。

わたしがこの子の担任になったのは、テル子が3年になった時でした。テル子は開墾の子でした。そして、はなをたらすすべと、時たまあげる動物的な奇声を発すること以外にできることがないようにみえました。

わたしが、テル子に要求したことの第一は、みんなとおなじ生活をすることでした。いままでは掃除も免除、朝会も免除、勉強も免除でした。だが、わたしは、しだいにお客さんであることの特権をうばっていきました。だらだらのぞうきんをのろのろうごかしたり、ぶつぶついいながら机にむかっていることが多くなりました。しかし、わたしもいくらかの工夫をしました。

小さな学校なので全校生徒が一教室にはいります。各学級の協力性をたかめることを目的にして週1回の学習発表会がありました。わたしは全員参加につとめ、テル子もかならず参加させました。特別の工夫というのはこんなことです。

草かり娘1「ひとふり、ふたふり、草をかる。」
草かり娘2「ひとふり、ふたふり、草をかる。」
1「あーあ、つかれた、つかれた。」
2「つかれた、つかれた。」
1「ここらでひとやすみだ。」
2「ひとやすみだ、ひとやすみだ。」
1「はらもへったし、おなかもぺこぺこだ。」
2「ほんとうに、ぺこぺこよ。」

草かり娘はひとりでもよいのですが二人にする。そしてテル子を2にする。セリフを暗記する必要もない。動作も1にならえばよい。ところが、テル子はなかなかの名優だったのです。たくまざる演技が喝采を博しました。「おなかもぺこぺこよ」とおなかをなでる動作など、笑いださずにはいられないものでした。そして、テル子は発表会だけ

でなく、いろいろな活動のなかに参加し、しだいに正当な権利と義務を行使するようになりました。

こんなテル子がはじめて文章らしいものをかいたのは3年生の11月の末ごろでした。

（1）

わたしは、この詩にも感激しました。さっそく学級通信にのせました。なんのかざりも関連もなく四つの文がならべられ、ほとんど黒一色の絵もついていました。わたしは、ここには、荒涼としたテルコの開墾地と心象が表現されているようにみえました。

その後、さきにもかいたように、しだいに占むべき彼女の座をみいだし、えがきだす絵も多彩で明るいものになってきました。文章表現ものびてきてはいたのでしょう。しかし、そこには、明瞭な変化をみとめることができませんでした。その後のテル子の文章をできるだけあげてみましょう。

（2）あかいもよみたいのもあります。なかさはしろいもよもあります。（3年3学期。理科。木の芽の観察）

（3）よこみちかいこんのひろいはたけ。いまころはさむいのでたくわんにやるのてたいこをほしてあきます。

（4）みんなげんきではるをまているすずめもよろこんでいます。ゆきもとてきたみんなよろこんではねまわってはるをまています。（絵につけた作文）

（5）きょうはいもしょいをしました。ふくろではこびました。うものうらのあなこさおきます。わたしはおもいので、おもしゃぐないとおもいました。にかいしよっていれました。いっぱいになったから、「あそびなさい」かあちゃんにいわれました。そしたらいものかわをむけとかあさんがいった。「これだけむけぼいいといいました。」あらったらあそびにいってもいいといいました。あそびさいった。ふみ子さんがまめをひろっておりました。ばあさんがふろたきをしていました。「おれもひろってくれるかといいました。」（4年2学期。作文展覧会）

テル子がかいた（1）の詩は、ことがらがならべられているだけです。ことがらとことがらの関係が意識されているようにはみえませんでした。（2）もそうです。（3）は、『家の仕事』にのっています。（復式学級でもあり、社会科では作業を多くしていました。みんなで絵や作文や図画をかき、ひとつの単元がおわると一冊の本ができるようにしていました。「みんなでつくる本」となづけていました。）テル子の絵には麦とキャベツの畑がかきわけられ、それにつけた説明が（3）です。ここでは、ふたつの「……ので」という形で、関係的認識がそだってきていることをみとめることができます。

ところが、つぎの（4）にはありません。

（5）は展覧会出品作で、2、3回かきなおしていますので同列には考えることができないかもしれませんが、4・6・9などにはふたたび、関係的認識があらわれています。また7では「そしたら」という接続詞（独立語）がありますが、ここでは多分に時間的な関係にとどまっているようです。そのうえ9～10、12～13のような重要なところでは関係的にとらえられてはいません。

いまは、テル子の意識をものごとの関係的なとらえ方の面からみてきましたが、それは、逆もどりしたり、停滞しているようにみえます。3年もおわり、4年もおわってしまったのに。

しかし、テル子の認識や学習がしだいに成長してきていたことは事実です。おなじ開墾で、1年下のふみ子はテル子についてつぎのようにかいています。

きょうは、うちにかいってから、テル子さんとほんをよみました。そして、たなべさんがうまいので、わたしはたまげてみていました。そして、わたしは、へたなのでたなべさんにおしえてもらいました。

そしたら、ねえちゃんが、「ふみ子、そんな

にへたなのか」といわれたので、かっこわるくなったので、いっしょによみました。（テル子がまもなく5年になろうとしている2月）

たしかにテル子は、いままで学力の最低の基準でもあったようです。子どもたちは、いつもテル子にくらべて安心していたようです。だが、それはゆれうごきはじめてきたことがわかります。

しかし、テル子はもう5年です。テル子の意識と生活は特にきわだった変化を示しはしませんでした。わたしはあせってさえいたのです。そんなときにテル子は「だから」という接続詞（独立語）のはいっている（6）の詩をかいたのでした。

この接続詞が、ふたつのことがらを原因（条件）結果の関係で密接にむすびつけていることはたしかです。この世の中で、「関係」の上に成立していないものはなにもありません。それは時間的な関係もありましょうし、因果的な関係もあるでしょう。量的、論理的な関係もあるにちがいありません。いずれにしても、そのような関係を明確に意識することで人間はひとつの質的な発達をとげます。そして、テル子は、いまそこに立っているのではないでしょうか。わたしの感動もそこにあったのです。

＊　＊　＊

あるいは長い道であったのかもしれません。わたしは、このテル子の詩をまた学級通信にのせました。テル子の成長をいっしょによろこびあいました。ところが、その翌日、社会科の時間にまたおもいがけないことがあったのです。

それは、日本の麦の産額について学習をすすめていたときのことでした。教科書には府県別の地図に、麦の収穫高が円グラフになってのっています。どの地方でとれるかということから、裏日本では、どうして麦がとれないのだろうと問題は発展していきました。「どうしてだろう？」とうながすわたしの声に応ずる手はどこにもない。そのとき、例のしまりのないわらい顔で、ひょいと手をあげたのはテル子でした。

わたしの指名に応じてテル子はひとことこたえました。

「ゆき！」

わたしは、おもわず、「うだ！」とさけんでいました。

テル子は、どんな思考の経路をたどって、このひとことをこたえたのでしょうか。

1、裏日本は雪が多い。「だから」二毛作ができない。

2、二毛作ができない。「だから」麦の収穫が少ない。

このような思考の結果として、あのひとことが生れたとは、いま、にわかに断定できることではありません。あるいは、毎年のように雪にいためつけられている彼女の開墾の畑がそれを教えたのかもしれません。

しかし、それにしても、きのうとりあげた（6）の詩をうみだしたテル子の意識が、きょうの答と無関係だということもだれにもいえることではないでしょう。わたしはここでもテル子の答えをうんとほめることにしました。

彼女の顔は、そのはずかしさとうれしさでクシャクシャとなりました。

こんなことがあって一学期がすぎました。テル子のかく絵はめだって変化をみせはじめてきました。まず、テル子の絵についての仲間の批評をかいてみます。

○　テル子さんのは、よくみて、くわしくかいている。うちのかきかた、木のかきかたがよい。ものとものとのつりあいも、よく調和しているのはよい。（浩二）

○　テル子さんのは、秋の感じがよくでておる。秋のかんじのあかるさがでておる。木やうちは力づよくかいて、いかにも木がたおれてたまるかというようなかんじがでておる。ぜんたいをみてかいておる。（みよ子）

この二人は学級の実力者であるが、ここにはテル子を軽蔑している空気は全然ない。そして、共通して「ものとものとのつりあい」「調和」「全体」など、つまり「関係」の表現をとりあげています。この絵はいまもわたしのところにありますが、鳥居、こま犬、樹木、社の大きさなどが、遠近法にかなったつりあいをもっていますし、色づいてき

た樹木の色も関係的にとらえられています。

テル子の絵は三転してきました。はじめは黒や赤などを主としてかきなぐられた強烈な表現。つぎにはもえぎやコバルトなどを主色とした多彩で明るい絵。そしておわりにはリアルで調和（遠近・大小・全体と部分・色彩相互）などのとれた技法。ある意味では彼女の絵は強い個性をうしなったのかもしれません。だが、わたしは、通過しなければならないひとつの段階だとみたいのです。そして、（6）の詩で「だから」という表現をとったテル子の意識が、ここでは、このような絵をかかせているのだと、わたしはおもいたいのです。

テル子は、たしかに、ひとつの成長をしめしたのではないでしょうか。

＊　＊　＊　＊

わたしが、テル子たちと生活したのはもう20年以上も前になります。いまは福島市になっていますが、土湯という温泉の小さな学校でした。この地方は、まだ「西在（にしざい）」といわれる辺境でした。わけても土湯は吾妻山のふところにありました。経済的には恵まれている旅館の子もいましたが、国有林のはらいさげをうけて日釜を焼く、製炭業者も多く、開墾部落で貧窮にさいなまれる子どもたちも相当多かったのです。なかには、学校にくるとまったく口を開かない子もありました。そのような子どもたちが1年で自由闊達にふるまうのは遠足の日だけだったのです。からになった学校にのこっているのは、遠足にいけない彼等だけでしたから。

幸か不幸か、わたしの組には特権的な旅館の子どもはいませんでした。テル子の開拓地は海抜７００メートルもありました。吾妻から吹きおろす強風と、夏でもながれる白い霧はいくらの収穫もあたえてはくれませんでした。そのうえ、樺太から引き揚げたこの開拓の親たちは、もう人生の頂上をとうにのぼりつめた人たちでした。子どもたちを、通学させることだけで精いっぱいでした。だが、わたしはここで、はじめて、子どもの成長をみたとおもいました。子どもたちの成長にかかわる仕事ができたとおもいました。もう、そのとき、わたしは15年も教師という仕事をつづけていたのです。はずかしいことです。はずかしいことですが、ありがたいことでした。そのことを、わたしにみせてくれたひとりがテル子でした。天然パーマでおどりくるっている彼女のかみ。はなの下をかざる2本の濃い半流動体。それらのものは、いまどのような変化をしめているのでしょう。そして彼女の開拓地は。

ひとりの平凡な教師であるにすぎないわたしに、教師としての壮大華麗なよろこびというようなもののありようはずはありません。しかし、教師というものは、ひとりの子どもが「だから」というたったひとつのことばをものにするというような微小なことがらにも、はかりしることのできない無限のよろこびを感じることができるものなのです。教師以外のだれが、このようなよろこびをしるでしょうか。

〈みやざき附記〉これは、小著『人間づくりの学級記録』（昭32・麦書房刊）の一節に資料をおぎない、かきなおしたものです。

編集部注：この文は、すばる教育研究所の機関誌「教育すばる」創刊号（１９７７・９）から転載しました。

教師が育つということ

佐々木　光　一

１９６９年の４月から登米郡（現登米市）の豊里中学校に勤めた。初任校では、数学のほかに免許外の理科を担当することになった。数学の教員だったら理科も大丈夫だろうという判断をしたらしい。全くいい加減な考えをしたものだ。しかしこのことが、私にとっては、実に幸運的なことであり、その後の教員人生の方向を決定づけたと、今になってつくづく思うことがある。

当時の私は、理科の授業がある日など、いくら教科書を予習し準備を整えたつもりでも、不安な気持ちに駆られてしまい、登校拒否を起こしそうになったことが何度となくあった。

そんな私を温かく見守り支えてくれたのは、周りの教師集団であり、そして何よりも子どもたちだった。その教師集団の中に、理科の実践家である佐々木清さんがいた。彼は、全国サークルの「科教協」や高橋金三郎さんたちが関わっていた「極地研」のメンバーとして授業実践に取り組んでいた。そして、私の様子を見かねた彼は、「一緒に勉強してみないか」と声をかけてくれたのだ。

そのおかげで、私は彼の生徒として、教材研究や授業作りについて学ぶことになった。清さんに誘われて、組合の教研に参加し始めたのもその頃からである。

そうしたある日、宮教組主催の授業実践検討会で授業してみないかと清さんに強く勧められ、密度（「ものの浮き沈み」）の授業をすることになってしまった。放課後は、何度も何度も授業案を練り、教材研究を繰り返した。仮説を立てて、実験を通しながら学んでいくやり方を取り入れたのだが、予定時間を大幅にオーバーするなど、自分の未熟さをさらけ出す結果となった。

授業の検討会は、学校から程近い旅館に泊まりがけで行われ、夜遅くまで議論したことを憶えている。この失敗が、それまでの自分を変える、大きな原動力の一つになったと確信している。

初任の頃の私は、教科書通りに授業を進め（教科書の問題点などを明らかにするためには大切なことだが）、「このやり方だったら誰でもがわかるはずだ」と信じて、「授業」をしていた。わからない子どもがいても、それが自分の責任だと気づかずに。わかる子どももいれば、わからない子どももいて当然。わからない子どもが努力しないからだ。わからない子どもが悪いのだなどと、そのことに何ら疑問も持たずにいたのだった。そんな私を決して責めるのではなく、むしろ温かく見守り支えながら、「子どもがわからないのは、授業者の責任だ」と気づかせてくれたのが、清さんをはじめとする教師集団だった。

教師として一番大切にし、守り通していかなくてはならない

ことなのに。いくら未熟で、駆け出しの教師であったとしても、それは許されるものではない。

清さんは、機会あるごとに学習会などに誘ってくれた。組合の行事や教研に参加し始めたのもそれがきっかけとなった。それ以来、数学の授業づくりに取り組み、それを楽しんできた。組合教研には、必ずレポートを持って参加し、自分の実践を多くの眼で検討してもらうことを心がけてきた。

70年当時の迫教育事務所には、鈴木市郎さん（後年校長として松山中学校での学校白主公開に深く関わった）が指導主事としておられ、毎週のように自作のプリント（当時はＢ４版ガリ切りで一枚一枚謄写版にて印刷）を各学校の数学教員宛に届けてくれた。それは、教材論を中心に授業論も含めて、私の新しい眼を開かせてくれ、日々の授業の参考になる内容であった。「楽しくよくわかる授業」を求めて「数教協」に入会したのもその頃であり、それは彼の影響とは決して無縁でなかった。

私の身近には民教連の仲間やサークルの研究者や実践家が常にいた。彼らとの交流が今までの歩みの原点となり、私をここまでリードしてくれた。そのことには心から感謝しているし、できることなら自分もそういう立場になれたらとも思う。数教協での出会いは、汲めども汲めども尽きることのない井戸のようなもの。全国にネットワークを広げ、多くの研究者や実践家との交流を深め、互いに学び合う機会を提供してくれた。

3年前に沖縄で行われた全国集会では、琉球大附属中の3年生を相手に公開授業をする機会を得た。題材は、「ピタゴラスの定理」で、私が約30年間、宮教組主催「夏の学校中学生教室」に関わり実践した内容で、それを一部手直ししたものだ。

一昨年の3月、卒業以来一度も訪れたことがなかった母校に足を踏み入れることになった。古びた椅子に腰を落とし、38年の歳月の流れに驚きながら、しばし、学生時代を過ごした懐かしさに思いをはせた。第54回数学教育協議会全国集会の準備会に参加するため、岩手大学数学科の小宮山教授（現東北数学教育協議会委員長）を訪れた時のことだった。私が全国集会の準備に直接関わるのは、その時が3回目であった。最初は作並集会、続いて八戸小牧温泉での集会、そして岩手花巻集会ということで、ほぼ10年ぐらいを周期に関わったことになる。06年の花巻集会は、東北数教協がその運営担当にあたった。全国からの参加者は、８００名をこえ、全国に向けて、東北の実践を発信する好機となった。数教協のおかげで、北は北海道から南は沖縄まで各地を歩くことができた。夏休みを利用しての全国集会参加は、家族との小旅行を楽しむ一つの機会でもある。

教育現場を離れて3ヶ月、授業のできないことが何よりもつらい。そのストレスが大きくならないようにと、日々念じている。

編集部注：この文は、宮城民教連機関誌「カマラード」41号（１００７年８月）より転載しました。

宮城の教育遺産　9

文彦にあてた磐渓の手紙

―教員養成の源流にふれて―

大村　榮

1、小学校の発足と藩校とのかかわり

明治五年に「学制」が発布され、六年に入っていよいよ小学校が開校する。仙台の戸長兼学区取締だった今村畔・佐藤信義は連名して、県参事宮城時亮にあてて、つぎつぎと払い下げ願いを提出している。

まず、寺院、修験所などを教室に当てて小学校を開校してみたものの、予想以上に生徒の入校が多く、早速にも教室が手狭になって増築の必要ができた。その増築資材に養賢堂の手習所二棟を金七円五十銭で払い下げ、毎区七校（三百人町、東二番丁、大払前、北六番丁、片平丁、南材木丁、立町）の学校に使用させて欲しいという趣旨である。

もっとも、開設の当初の見積りでは、「生徒百人ニ弐人位出席目途ヲ以テ営繕ニ及ビ候処、私塾残ラズ放塾ニツキ年齢十三歳以上十七歳余ノ生徒マデ出席ニツキ」、予想以上の盛況となったと述べている。

三百人町常林寺一番小学校（のちの荒町小学校）の沿革史には、つぎのような記述があって、このことを裏書きする。「明治六年五月、創メテ仙台市三百人町常林寺内ニ養賢堂手習道場ノ一部ヲ移転シテ仮校舎トシテ（下略）」

しかし、この払い下げ資材を使って増築したのは、ひとり一番小学校のみでなかったろうと推察される。

つぎに、「元仙台藩養賢堂ニテ生徒共相用候習字机、小学校ニ御払下げ成シ下サレ度キ願」が提出された。これも、願いの通り机一箇二厘の割で、百三箇を金二十銭六厘で払い下げられた。

これにつづいて、「毎区小学校へ相用ヒ度ク在ジ奉リ候間、御有リ合セノ堵（らち）拝借成シ下サレ度キ願」が出されている。

この願書によると、七月七日までに区内の小学校は残らず開校したが、男女の席を区切るために、旧養賢堂で使用していた間仕り用の埒が数十脚も蔵におさめてあったはずだから、そのありあわせのものを貸し出して欲しいというのである。これは、払い下げ願いではなく、借用願いである。

さらに、「元仙台藩ノ節、習字生徒稽古場江御用立居候古損畳、小学校江御払イ下ゲ成シ下サレ度キ願」が出される。

この願い書にも、旧養賢堂手習所が使用していた古損の畳が七十六畳あったはずだから、これを金七十六銭で払い下げ、毎区の小学校に使用させていただきたいという趣旨が書いてある。

文明開化の方針にしたがって、教場には西洋風の机、椅子を並べてみたものの、教師の控所にはやはり畳を敷きたかったのであろう。そこで、養賢堂手習場の古畳の払い下げを求めたわけである。

それにしても、よくこんなにもつぎつぎと養賢堂の施設設備をはぎとるように払い下げて使用したものだと驚かされる。まるで勝手知った自分の持ちものを蔵の中から運び出すように、品名、員数、収蔵の場所まで書きそえて願い出ている。

それというのも、創設された小学校の仮教師たちは、そのほとんどが養賢堂の出身者で、なかに

は三番大佛前小学校の太田有孚とか七番立町小学校の男沢抱一など元養賢堂指南役・教授がひかえていたのである。

これらの払い下げは仙台に限ってのことであったが、小学校の発足が深く養賢堂の教育とかかわっていた事情は、旧仙台藩領の宮城・水沢両県とも同様であった。

なんといっても、旧仙台藩領では、「学制」実施直後に小学校仮教師となった者のうちに養賢堂出身者が多かったのである。中でも佐沼小学校には学頭の新井雨窓がいたし、坂元小学校にも副学頭の石沢成遠がいた。また、著名な指南役や教授で仮教師となった者も少なくなく、桃生郡大森小学校の日野徳輔、宇多郡谷地小屋小学校の氏家閑存、宮城郡上谷刈小学校の白石山人、栗原郡荒谷小学校の伊藤東里などをあげることができる。

とくに、注意すべきことは、養賢堂出身の青年学徒の多くが師範教育を受けて小学校教員となり、明治期の教育を強力に推進した事実である。しかも、その教員養成の源流となった創設当初の官立宮城師範学校が、どんな校風をそだてていたのか。この春、それをうかがわせる貴重な資料にふれることができた。

1　「仙台者に致さざるやう……」

それは、『宮城県教育百年史』の監修をされている字野量介先生が、第四巻資料編のために持参された大槻文彦関係の書翰（復写）四通の中にふくまれていた。

父の盤渓が官立宮城師範学校の校長となった次男文彦のために、「師範学校」の四文字を額字として揮毫し、それを郵送する折に書いた手紙である。

解読しがたいところもあって、同室の横山正氏や県図書館の高倉淳・浅野篤郎氏をわずらわし、一応は読みくだすことができた。その全文を読みやすく書きなおして、つぎに紹介してみよう。

「四月十八日の書、昨二十二日着。

師範学校の額字でき、郵便に差し出し候。校の字、少し気に入らず、但し三度目の正直と此のまま相廻し候。なにとぞ、開校のまに合はせたきものに候。

（注・なお、書き出しの二行目までの行間に、揮毫した書を額に仕立てるについての注意書が挿入してある。上ノ方デタケヲツメル、墨點ハヌケレバ尚ヨシ　タトヒ抜ズトモ格別目立ハスマイ）

〇重右衛門出帆もいまだ知れず、いずれ月末に相成り申す可き歟。

小学校開校（小学師範学校の意）四十八人入学、且、類令利の由（注・入学の生徒は英才ぞろいとのこと）、同慶の事に候。これからは、仙台者に致さざるやう精々勉励これあるべく候。

余は、重右衛門立つまでに調え置き相渡し申す可く候。花はどこもかしこも散りて仕舞ひ候。園中藤花盛開、牡丹も今ごろ咲き申す可く候。一昨日は北里の桜花も一覧、茶屋にて一杯欽み所談。おなを外一人、径に迷うあり、転気散欝いたし候ひき。そのほか佳興もこれあり、まずまず無病に老を送り悦ばれ申す可く候。兄さん（注・文彦の兄如電）も至っておとなしく勉強、これまた安心の事に候。観跡聞老誌ははやく見申し度く候。愛古堂漫筆（注・愛古堂は盤渓の別号）は額へ付けて一部相預け候。澤山に候。重右衛門の時に御待ち下され度く候。草々

四月廿三日　　愛古翁

文彦殿」

一読して、盤渓の文彦に対する濃かな愛情に心うたれる。文彦が宮城師範学校設立御用係として仙台に着任するのが九月、旧養賢堂敷地へ西洋造りの師範学校の校舎建設に着手するのが十月、工事の指図やペンキのつくり方、窓の戸の蝶つかいのつけ方まで、御用係の文彦が直接あたったという。

広く奥羽越佐から俊才を集めて授業を開始するのが十一月、この月に文彦は正式に校長に任命されている。校舎が竣工し、落成開校式を挙行するのが翌七年五月十五日である。

この手紙は、その日に間に合せて新校舎の玄関にかかげる額字を揮毫して送ったことを知らせるもので、四月廿三日付の発送である。

わたしは、昭和八年に宮城県師範学校本科第二部に入学し、十年に卒業した。さらに、昭和十五年から二十五年三月まで、この師範の付属学校に

勤務したから、正面玄関の磐渓筆の「師範学校」の四字は、在学中も在任中もいつも親しく眺めていたと言えよう。

しかし、それなのに、これが書きなおしをかさねること三度めの正直で仙台に送られて来たことか、まして、この額に「これからは仙台者に致さざるやう精々勉励これある可く候」との磐渓の切実な願いが秘められていようなどとは、全く予想もしていないことであった。余りに強い衝撃を受けたものだから、その後しばらくは、この事実の底にあった事情を知りたいと願い、いろいろな資料をあさってみた。

3　師範学校の開明的な人脈

この消息をうかがうためには、文彦が六十三歳の時に口述した『大槻博士自伝』や、如電口授・文彦補言、孫茂雄ら記述の『磐渓先生事略』などが参考となる。

事情は複雑だが、戊辰戦後の仙台藩の処分にからんで、佐幕派の遇し方を手ぬるいとして藩内の勤王派と自唱する者が明治政府に訴え出ている。そのため、いわゆる「仙台騒擾」が起った。その結果、仙台藩から多くの犠牲者を出すことになったが、元養賢堂学頭だった磐渓も、仙台藩の開国派であり、奥羽列藩同盟結成の推進者だったとして明治二年四月に、永揚屋入り（入牢）となった。その頃、難を避けて横浜に逃亡していた文彦も、父の急を聞いて仙台に帰り、八方策をめぐらしてその救出に成功している。

この当時のことを、維新前から磐渓と親しかった福沢諭吉（文久年中に福沢が幕府の使節について洋行する時に、磐渓がその相談にあずかっているというし、また、福沢が楠公権助の説を出して世論の批難を受けた当時、磐渓は朝野新聞に投書して福沢の立場を弁護している）は、その老『福沢自伝』の中で、つぎのように述べている。

（仙台騒擾の難を避けて東京まで逃げてきたという）大童（信太夫）と松倉（良助）はどうやら斯うやら久しく免かれて居て、私は素より懇意だから其居処も知て居れば私の家にも来る。政府の人から見られるのは苦しくない、政府はそんな野暮はしない、そんな者を見やうともしないが、何分にも同藩の者が遺るので誠に危ない。引捕へて、是が罪人でございますと云へば、如何に優しい大目な政府でも唯見ては居られない。実に困た身の有様だと、毎度両人と話す中に、私は両人の為めに同情を表すと云うよりも、寧ろ此仙台藩士の無情残酷と云ふことに酷く腹が立ちました。弱武者の意気地のない癖に酷い事をする奴だ、ドウかし呉れたいものだと斯う考えた所で、……（略）（注・表現は原文のまま）

磐渓が文彦に送った手紙の中で、「これからは仙台者に致さざるやう精々勉励にこれある可く候」と書いているのは、どうも、この仙台藩士の無情残酷さと弱武者の意気地なしの癖に酷い事をするところとを指していたように推察される。

あるいは、磐渓の目が仙台人のいやらしさを、その深底まで見通していたのかも知れない。

ところで、文彦が明治八年に宮城師範学校長を免ぜられ、文部省報告課勤務となって日本辞書（のちの『言海』）の編纂を命ぜられると、文彦のあとを継いで宮城師範学校長となるのが福沢門下の松林義規である。この松林校長が、さきの大童信太夫（黒川剛）を師範学校の教頭格の教諭に採用している。この大童については、『福沢自伝』がつぎのように書いている。

「仙台藩の留守役を勤めて居た大童信太夫と云ふ人があって、旧幕府時代から私は其人と極懇意にして居ました。と云て其人が蘭学者でもなければ英学者でもないけれども、兎に角に西洋文明の風を好み洋学書生を愛して楽しみにして居る所は、気品の高い名士と申して宜しい。……大童も大藩の留守居だから随分金廻りも宜かったらうと思はれるに、絶えてそんな馬鹿な遊びをせず、唯何でも書生を養て遺ると云ふことが面白くて、書生の世話ばかりして、凡そ当時仙台の書生で大童の家の飯を喰はない者はなかろう。今の富田鉄之助（日本銀行総裁、東京府知事、東華学校創立者）を始め一人として世話にならない者はない。」

のち、松倉は仙台区長となり、大童は牡鹿郡長になるが、時の宮城県令松平正直が大童を郡長として登用しようとして、その適否を福沢にたずねたところ、「大童は郡長には適さないが、県令、参議に適任である」と答えたという。（参照、今皇幸篁洲著『仙台人物史』）

官立宮城師範が明治十一年に廃校になり、その学統は文彦の弟子木村敏の開校した教員伝習学校の後身（仙台師範学校）に引きつがれる。そのあと明治十七年ごろまでは、歴代校長の中に福沢門下の吉川泰二郎・箕浦勝人・和久正辰らがつづき、開明的な校風をそだてた。その影響は実に大きい。

4　教師のエトスを高めたもの

その一つの例が、顕著な就学率の高まりである。宮城県における明治期の学齢人員就学推移を見ると、まことに特色あるカーブを描きながら明治二十八年には全国一のピークを示している。しかも、それが全国平均のカーブでは、明治十二年九月に「学制」が廃止され、自由裁量の余地の多い「教育令」が出されると、財政的事清などから地方によっては廃校が続出し、全国の就学率が目立って低下しているのに、本県ではかえってこの年度を境にして就学率が上昇しているのである。（参照、『宮城教育百年史』第一巻二一一〇五頁）

維新後の混乱と窮乏の底から立ちあがった本県の教育が、しばしば冷害凶作などにはばまれながらも、明治十三年以後、二十年代にかけて他県に見られない活況を示した事実の底に、どんな条件があったのであろうか。

少なくとも、その一つの理由は藩政時代から養賢堂を中心としてつちかって来た仙台藩文教の遺産が継承されていたことと、一方ではこの遺産を継承しながらも、あえて「これからは仙台者に致さざるやう精々勉励これある可く候」と大胆に因襲を否定し得た勇断と見識が、教員養成の主流にあったとみることが出来る。

そう言えば、宮城師範学校の創設時に、文彦とともに仙台に赴任した金成善左衛門（文部省十三等出任）は、仙台藩士であったが戊辰戦争の直後に箱館（のち函館）に逃れ、榎本武揚のもとで五稜廓戦争の陸軍奉行添役をつとめ、のちには志田・玉造の名郡長とうたわれたのに、それをなげ打って自由民権運動に参加し東北自由新聞を創刊している。

そればかりか、文彦の高弟の木村敏校長が教員伝習学校を創設することになると、さきにニコライの招きに応じて箱館に渡り聖書翻訳や露和字典編纂の仕事を援助した元養賢堂指南役真山温治（洗礼名ベートル）を理科・史科兼務予科教師に任じている。しかも、それは明治八年のはじめのことで、仙台でハリストス正教徒弾圧（逮捕三〇数名・禁足一三〇余名）のあった三年後である。

教員養成学校の教師たちのうちに、このように異色な人事があったことは、養賢堂の学統を継承しながらも、かなり意識的にこれを刷新しようとした意図がうかがわれる。それに、さきに見たような福沢門下の自由で開明的な教員養成の校風が、この期の教師たちの士気を昂揚させたのではないか。にわかには断じがたいところだが、明治十年代から二十年代にかけて活躍した本県教師たちのエトスを高め、そのエネルギーをつちかったものが何であったか、それは今後ひきつづいて究明すべき興味深い問題である。

編集部注：この文は「すばる教育研究所」機関誌「教育すばる」創刊号（1977・9）より転載しました。